

悠久の京を訪ねて Part II Vol.8



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

京は古より人々が集い、その気候・風土の中、生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土物により縄文、弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

人形に託された願い事

京都府木津川市



木製人形

人の形をかたどった偶像は、古代から信仰の対象として、また呪具として用いられていました。歴史時代の遺跡から出土する人形には、木製・金属製・石製・土製・切紙・張子製などの材質のものがあり、用途としては、まじない・祓い・神への供えなどに使用されたようです。

木製人形とは、短冊状の板を、人間の頭部・胴部・手・足(正面の全身像)に切り抜き、墨で顔の表情などを描いたもので、7世紀後半に、中国から道教の思想とともに日本に伝わったと考えられています。



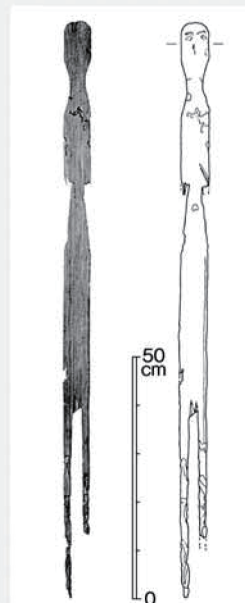
木製人形の顔の表情

釜ヶ谷遺跡出土の木製人形

木津川市釜ヶ谷遺跡では、奈良時代の川跡から祭祀遺物が多数出土しました。川の岸辺では、祭祀が頻繁に行われていたようです。その一か所から土器の表面に墨で鬼の顔を描いた墨書人面土器やミニチュアかまど・斎串などと共に木製人形が出土しました。

人形は、全長120cmと大きなもので、最大幅6cm・厚さ0.7cmも測ります。普通の大きさは20cm前後で、なかには10cmに満たないものや、30cmを越すものもありますが、この人形は随分と大きなものです。片手・片足など部分的に欠損していますが、全体的によく残っており、眉毛・目・鼻の墨痕が薄らと見て取れます。この人形は、川の岸辺で出土したことから、水に流して、願い事を行う呪具として用いられたと考えています。

さて、平城京と恭仁宮の間に位置する釜ヶ谷の地でこの大きな人形にはどのような特別の願い事が託されていたのでしょうか。



釜ヶ谷遺跡から出土した木製人形